

半数以上であった

特別な問題点を持つ症例は、再企図例、後に既遂に至った例、反社会性人格障害の例、遠方から当地に来て自殺企図をした例、ビザなしの外国人の例、他害行為を伴う例、同朋例などがあった

6 新潟大学医学部附属病院における精神科救急医療

細木 俊宏・柴矢 俊幸（新潟大学大学院
医歯学総合研究科
精神医学分野）

新潟大学医学部附属病院における平成11年、12年の平日夜間及び休日における精神科受診症例を調査し、現状の把握とその問題点について検討を行った

平成11年、12年の2年間に精神科受診した件数は325人、全科の約1割であった。平均年齢は34.3歳、男女比は約1.2と女性が多かった。外来時精神科診断では精神分裂病圏が33%と最多であり、精神症状のための受診が75%と最も多かった。入院症例の診断は精神分裂病圏が32%と最多であり、人格障害がそれに続いた。入院件数は大量服薬による自殺企図によるものが52%と最も多かった。

以上から新潟大学医学部附属病院における精神科救急外来ではソフトな精神科救急対応件数が最多であるが、入院においては大量服薬による自殺企図など身体管理が必要な症例を中心に対応が行われていた。しかし、身体管理のためのベッド確保の困難、大学附属病院としての機能の未確立など問題が残されている。

7 県立療養所悠久荘での精神科救急と実態

丸山 直樹（県立療養所悠久荘
精神科）

新潟県の精神科救急システムは、平成9年9月から運営されている。その内容は、土・日・祭日・年末年始の日中（9時～17時）対応である。県内を5ブロックに分け、ブロック内での輪番制をとっているが、一定の実績をあげている。当院は、県の

精神医療基幹病院としての任務を担う他に、県央ブロックの輪番病院のひとつとして参加している。

平成12年度での救急実績をみれば、精神科救急システムの枠では、実働日57日/120日、対応件数600件、その内入院した数は13件であった。その他に、平日夜間帯での救急も従来からやっており、これには、県央だけにとどまらず、下越地域からも要請がみられる。これを含めると年間227件の対応数があり、内65件の例が入院をしている。この実態の中にいくつかの問題点がある。（1）身体的医療が優先されるべき例が、搬送されてくる。（2）反社会性人格障害者の受診適応性。（3）夜間救急未整備のため広い地域からの搬送。以上の様な実態と問題点を提供する。

8 精神科救急医療の実態

田崎 紳一（県立小出病院
精神神経科）

小出病院精神神経科は「合併症患者の受け入れと24時間365日の医療体制」を合い言葉に精神科救急医療に取り組んでいる。

それは平成12年1/1から12/31の一年間で、通院患者実人数1372人、一日平均患者数129.8人、外来新患者数457人、年間延べ入院者数503人、夜間・休日の時間外入院は119人、平均在院日数、81.6日という実績として数字に表れている。このような業務の中で金子らは合併症を有する精神科患者さんの救急医療を円滑に進めるためのやり方として「小出式トリアージ」という方法を提案している。しかし、救急の現場では「小出式トリアージ」がうまく機能しないことがある。その実例を紹介しつつ精神科救急の全般的な問題点についても言及したい。

9 本県の精神科救急医療体制の現状と課題

野口 晃（新潟県福祉保健部
健康対策課）

本県では精神疾患の急激な発症や精神症状の悪化等により、緊急な医療を必要とする精神障害者